

サイクル施設は、そうした人々の深い苦しみや葛藤の上につくられてきたという歴史を、埋もれさせたくないという思いが強くなりました。それに、そうした反対運動の映像記録は系統立てては残されていないのです。これだけの抵抗の歴史があったんだということ、また、核燃立地のために相当の圧力や分断工作があったわけですから、その事実を明らかにしておかなければと考えました。

——もともとこの専門の写真や文章ではなく、映画という形を選ばれたのは？

島田 「六ヶ所村ラブソング」(鎌仲ひとみ監督)などのドキュメンタリー作品を見て、映画の「伝える手段」としての力の大きさを感じていたので。といっても私は映画はまったくの素人で、知識も技術も、人脈もお金も全部ゼロ。だから、最初は誰か青森県出身の監督に撮ってもらって、私は企画やプロデューサー的な役割に回ろうと思っていました。しかし、そうはうまくいかなくて……そうするうちに周りから「やっぱり思いついた人がやるのが一番だよ」とけしかけられたり(笑)。六ヶ所村でも、島田さんがやるなら応援するよと言ってくれる人もいたので、これは自分でやるしかないと思えました。

知人のカメラマンに撮影の助っ人を頼み、クランクインしたのが2011年2月。最初のロケでは、津軽地方を皮切りに八戸、六ヶ所と回りました。そして3月半ばに、2回目のロケを予定していたんです。——けれどその前に、東日本大震災が起こるわけですね。

島田 もちろんロケは中止。1か月くらいは「映画なんか作ってる

場合なんだろうかと、何も手につかない状態が続きましたが、結局は私にできることはこの映画を完成させて、世の中の人に見てもらうことしかないと思うに至り、制作を再開しました。

ただそのときも、これだけの大事故が起きた福島のことを描かないわけにはいかない、と思いましたが。福島での事故によって原発はこれだけ注目されているけれど、原発は例え事故が起これなくても、日々稼働しているだけで放射性廃棄物という大きな問題を生み出して、それが六ヶ所村へどんどん運ばれていく。いわば原発社会の「入り口」と「出口」ともいえる福島と六ヶ所とを、結びつけて描こうと思えました。それで、青森と並行して福島での取材、撮影も開始したのです。



福島での原発事故は、六ヶ所村の漁業にも深刻な影響をもたらした。放射性物質検出による出荷停止で、獲れた魚を沖でそのまま捨てる光景も。

### 六ヶ所も福島も「地域の問題」ではない。

——映画の中に登場する福島の人たちは、東京へと避難してきた家族、県外へ避難すべきかどうかを迷っている母親、自分の土地で農業を続けようと苦闘する一家など、さまざまです。その人たちの取材を続けられていて何を感しましたか。

島田 みんな、本当に迷って、悩んでもがいているんですね。避難した人は避難した人で、将来の自分たちの道が見えなくて苦しんでいる。一方で、福島に残った人たちも、本当にこれでいいのかと、親として子供を被曝させていることに自分を責めながら毎日を送っているわけです。それはとてもつらい日常です。

しかも、どうするのが一番いいのか、こんな状況がいつまで続くのか、答えは誰にもわからない。取材で話を聞いていても、かける言葉も見つからない……。私もすごく苦しくて、取材やロケから帰ってくるたびに、疲れ果ててぐったりする。その繰り返しでした。

——避難した人も、残った人も、双



方が悩み苦しんでいるんですね。

島田 さらに、避難した人たちと残った人たちの間で、互いに批判し合ってしまうという「分断」も起きている。それでまたそうした人間関係に悩み苦しむという新たな構図があります。健康への影響と目に見える被害だけではなく、人間関係を壊し、コミュニティを壊す、それが原発というもののなだた痛感しました。

——そうした「分断」はまさに、六ヶ所で起こってきたことでもありません。映画の中でも、核燃サイクルに強く反対を訴える地元の人たちが登場する一方、ある女性は「この事業が撤退したら食べていけない」という不安を語っていました。

島田 そのとおりです。制作の過程ですと考えると、そうした問題、どうしたら地元以外の人たちにも「他人事」ではなく「自分事」として捉えてもらえるだろうかと、ということでした。

福島も、六ヶ所も、決して「東北のある地域」だけの問題ではありません。原発事故に関して言えば、

高い値の放射線量が検出されている関東地方も現地です。また、そもそも福島にある原発でつくられた電気を消費していたのは首都圏の人間です。そしてその原発の核のごみは六ヶ所村へと運ばれている。つまり、原発の「入り口」も「出口」も、決して福島と六ヶ所の問題ではなく、この時代に生きる私たちが作り出してしまった大きな課題であり、一人ひとりがかかわっていることなんです。3・11以降その思いがさらに強くなりました。この映画を見た人たちに、そうした自覚を持ってもらえたら本望です。

——映画のフライヤー(チラシ)にも、「今の日本、この時代を未来のあなたへ伝えたくてこの映画を作りました」とありますね。「未来への伝言」というタイトルには、どんな思いが込められているのでしょうか。

島田 この時代にこんな過酷な原発事故があって、こんなにたくさ



### 「福島 六ヶ所 未来への伝言」

2013年/105分 監督/島田恵 制作・配給 六ヶ所みらい映画プロジェクト 音楽/加藤登紀子「今どこにいますか」「命結」

東京電力福島第一原発からわずか5キロの場所にあった福島県大熊町の自宅を離れ、東京に避難してきた田邊さん一家。やがて生まれた第二子にはふるさと福島への思いを込めて「福」ちゃんと言った。一方、青森県・六ヶ所村で漁業を営む滝口さん一家は、青森県太平洋沖で獲れたマダラから基準値以上のセシウムが検出されたため、魚をそのまま海に捨てる……。原発事故が起こった福島、核燃料サイクル事業が進む青森県・六ヶ所村。二つの場所に暮らす(暮らしていた)人たちの姿を通じて、放射能という「負の遺産」を未来へ残すことへの責任を問うドキュメンタリー。

●現在、各地で上映会を開催中。自主上映会開催の申込みも受け付けている。

んの人が苦しんだという事実を、同じ過ちを繰り返さないためにきちんと未来の世代へ伝えたい、という思いがまずあります。でも、それだけではありません。未来の、何世代か先の子孫たちが振り返ったときに、あの時代の人たちはあんな間違いをしただけで、それを反省し、そこから学び、新しい時代へと舵を切ってくれた。あの先人たちが賢明な判断と行動をしてくれておかげで、今の自分たちの安心な生活があるんだと思ってくれたら、この時代に生きた私たちが、一生懸命考え、将来の世代のために新しい未来を選択した、ということをお伝えしたいのです。

私たちが今いるのは、遠い先祖たちが「いのちのバトン」を連綿と引き継いできてくれたから。それを次の世代にちゃんとつないでいくことが、私たちの責任だと思っております。